

## 序章 4

## 小学校の現場から

## 小学校教師の専門性が生きる学校を

元東京都公立小学校教諭、千葉大学非常勤講師 今関和子

今、学校現場は忙殺されている。子どもの指導、保護者への対応、校務分掌・事務の多さは年々加速度を増している。教員の精神疾患、病気による休職や退職は深刻な問題となっている。職場の多忙化が教師に及ぼしている影響を今回の小学校調査の結果から考えてみたい。

## 1. 多忙化の中の教師の意識変化

巻末基礎集計表によれば、教員の出勤時刻は「7時半ごろ」から「8時ごろ」が83.4%。退勤時刻は経年比較をすると年々遅くなっている。勤務時間は11時間以上になり確実に増えている。休日出勤は月あたり64.7%の教員がしており、そのうち2～4日出勤している人は37.8%である。終日学校での生活に追われて大変な忙しさであることがわかる。しかし、校務分掌の負担については、「まあそう思う」「あまりそう思わない」が多い。

これはどういうことなのだろう。多忙な働き方に慣らされてしまっていることと、機械的な「作成しなければいけない事務書類」が増えているということによるだろう。

また、以前に比べ、「新聞を読んだり、読書をしたたりする時間」が減少傾向にあり、「テレビを見たり、音楽を聴いたりする時間」が増加していることから、自宅でテレビを見て、疲れを癒している姿が浮かぶ。教師自身の豊かな生活が失われている。そのことに教師自身が気づかなかったり、あきらめたりしているとしたら大変な問題である。豊かさのない者に豊かな教育はできないからだ。

## 2. 教師と子どもとの関係の希薄化

教師は子どもをどうみているのだろうか（6章1節図6-1-1）。児童の変化では、「リーダーシップのとれる児童」「協調性のある児童」「自己表現力の高い児童」が「減った」という回答が4割弱～6割台である。逆に、「自己中心的な児童」「疲れている児童」は「増えた」

という回答が6割台である。また、「特別な支援が必要な児童への対応が難しい」が「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせると75.3%と高い（8章4節図8-4-1）。保護者の様子についても「学校にクレームを言う保護者」「子どもに無関心な保護者」が「増えた」が5～6割台である（6章2節図6-2-1）。このことから子どもの指導や保護者への対応が年々難しくなっていることがわかる。

実際、学校現場では、子どもへの指導・保護者への対応に苦慮している姿が日常的にみられる。また、1つの学校の中で、1クラスや2クラス、学級崩壊状態があってもすでに驚くような状況ではない。

また、教師間の会話はどうなっているのかをみると、「児童のことについて話し合う」「指導方法について話し合う」「先輩・同僚に気軽に相談する」など、意思疎通は行われていると読める（7章6節図7-6-1）。しかし、じっくりできているわけではない。現場の教師たちは朝の打ち合わせのあとや、休み時間、給食準備中、放課後の仕事の合間に、立ち話で手短に情報交換や相談事をしゃべりあっていることが多い。それほど時間に追われている。時間はないが、話したり、相談したりする時間がほしいということとして読める。

しかし、教師の悩みで、「子どもたちが何を考えているのかわからない」について77.7%の教員が「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」と回答している（巻末基礎集計表）。また、満足度をみると、子ども、保護者・地域関係や職場について「とても満足している」「まあ満足している」という回答が7～8割にのぼる。

子どもの状況は難しいという一方で、教師は子どものことはわかっており、「満足している」という結果は矛盾している。これは何を示しているのだろうか。

教師が子どもの心をどう理解しているのか

に、変化があるのではないか。忙しさ(教材準備、指導案作り、事務書類など)に追われることで、子どもに対応する時間が作れず、子どもの声を聞くことが減り、次第に子どもの声を聞かない教師になっているのではないか。その結果、子ども理解で悩むことのない教師になっているのではないか。

教師と子どもとの関係が希薄になっていると考えると気がかりである。

### 3. ひたすら授業をこなす教師たち

しかし、教師の仕事への満足度をみてみると(8章3節図8-3-1)、教職の魅力について、「とてもそう思う」「まあそう思う」という回答が8割以上のものは、「子どもと喜怒哀楽をとものにできる」「子どもとともに成長できる」「社会を支える人を育てることができる」「将来にわたって子どもの成長にかかわれる」「自分の専門知識やこれまでの経験をいかせる」の項目で、子どもの成長を教職への魅力として感じていることがわかる。子どもの成長に関心を持ち、教職という仕事についていることに希望を持つ。

しかし同時に悩みとして、「教材準備の時間が十分にとれない」が56.5%（「とてもそう思う」）であり、教材研究や授業研究に費やす時間が年々減る傾向にある。また、研究している領域では、「国語」「算数」が多いが、「国語」は減る傾向にある。また「社会」「理科」も減る傾向にある（7章1節図7-1-1）。そして、教科の指導が得意かどうかをみると、この4教科では「苦手」（「どちらかというと苦手」+「苦手」）の比率が増えている（巻末基礎集計表）。

教材や授業の研究をしたくて、その時間がとれない。そうした日々の中で、研究への興味が薄れてしまっているのかもしれない。

教職への魅力を感じながらも、とりあえず日々の授業に追われ、本来の意欲を感じられない教師の姿が見える。

### 4. 小学校教師の専門性とは何か

教科の指導が得意かどうかについて、「社会」が「どちらかというと苦手」が46.2%にも及ぶことに深刻さを感じる。社会事象への関心を持ち、研究を深めることなしに社会科の授業は難しいからである。

また、今年度から「外国語活動」が本格実施されている。小学校「全科」免許には何が求められているのだろうか。英語の免許は持っていない教師がほとんどである。慌てて会話を習い始めたという笑えない現実もある。やがてそれも「全科」免許に含まれるのだろうか。中学校、あるいは高校の教師には考えられないことではないか。

初等教育も中等教育も教育の内容は違っても「教育の専門性」を問うたら、どちらも専門的であることには変わりがないのではないか。しかし、小学校の教師には現状では器用にさまざまなことをこなすことが明らかに求められている。このままでは小学校教師は、教職の本来の役割を果たせない。

本調査の結果をみて、小学校教師は忙しさの中で、その専門性を奪われているという危惧をいだいた。本調査が、教職への魅力と専門性が生きる学校の再生に活かされることを願う。